

自己評価報告書

平成 23 年 5 月 1 日現在

機関番号：14301
 研究種目：基盤 A
 研究期間：2008-2012
 課題番号：20252009
 研究課題名（和文） 多文化横断ナラティブ・フィールドワークによる臨床支援と対話教育法の開発
 研究課題名（英文） Methodology of clinical support and dialogical education based on polyphonic narrative-fieldworks across multiple cultures
 研究代表者：
 山田 洋子（YAMADA YOKO）
 京都大学・大学院教育学研究科・教授
 研究者番号：20123341

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学 3902

キーワード：ケア、ナラティブ、フィールド、医療、対話、教育方法

1. 研究計画の概要

心理学、医学、看護学による国際コラボレーション・プロジェクトを組織し、ナラティブ（語り・物語）アプローチによって、海外 4 都市の大学を中心に、多文化横断・学横断的にナラティブ・フィールドワークを行う。文化・領域の特殊性を大切にしながら、それを超えて横断的に対話できる多文化ナラティブ理論と方法を探求するとともに、質的方法を生かして多文化価値が共存・拮抗する現場のニーズに応える実践的な臨床支援法と、対話的教育法プログラムを開発する。

具体的には (1) 国際プロジェクトと (2) 学際コラボレーション・プロジェクトの 2 大プロジェクトを並行して行う。(1) では、ウィーン・ロンドン・ハノイ・シカゴの 4 都市における学際的なシンポジウム、ワークショップ、フィールドワークを毎年実施し、多文化ナラティブの方法論、教育法を探求する。

(2) では、「教育実践交換プロジェクト」「多声発信プロジェクト」「協働の学びプロジェクト：ナラティブ・データ分析合宿」の 3 つのプロジェクトを行い、①相互研鑽の学横断フィールド、②国際プロジェクトの準備、共有、反省の場、③若手研究者・大学院生等の教育の場、の三重の場の生成を目指しつつ、情報発信を行っていく。

2. 研究の進捗状況

これまでの成果の概要を (1) 国際プロジェクトと (2) 学際コラボレーション・プロジェクトの 2 つに大別し、以下に述べる。

(1) 国際プロジェクト

①ウィーン大学における国際プロジェクトでは、教育臨床心理学と生涯発達心理学および社会心理学にまたがるシンポジウム、国際

学会での共同発表、および異文化教育現場におけるフィールドワークを通して、多文化ナラティブ理論についての対話的实践を行った。

②ロンドン大学における国際プロジェクトでは、イギリスのナラティブ・ベイスト・メディスンの専門家と共に、ナラティブ医学、ナラティブ心理学および教育臨床心理学にまたがるシンポジウムを開催するとともに、医療・教育現場の臨床支援法についてのフィールドワークを行い、心理臨床や精神分析的な心理療法のトレーニング方法を実践的に学習した。

③ハノイの国際プロジェクトでは、ベトナム社会科学院・東北アジア研究所にて、生涯発達心理学と小児看護学および社会心理学にまたがる国際シンポジウムを行うとともに、ハノイの保育・看護教育現場と市街地でのフィールドワークを実施し、多文化交流を実施した。

(2) 学際コラボレーション・プロジェクト

各国際プロジェクトと並行して、以下のよう、①教育実践交換、②多声発信、③協働の学び、の 3 つのプロジェクトを継続的に実施した。

①教育実践交換プロジェクト

広島大学、赤十字看護大学、京都大学等において、ナラティブ関連の講演会やセミナーを開催し、ナラティブ研究の方法論、研究技法および教育方法についての議論を行ってきた。

②多声発信プロジェクト

電子媒体を通して情報発信を継続的に行うとともに、看護者や保育者の感情労働や映像ナラティブに関するシンポジウム・ワークショップ等を実施し、国際的・多声的に対話

を行う場を生成した。

③協働の学びプロジェクト

ナラティブ・データ分析合宿を行い、ナラティブ・セッション、スーパーヴィジョン、ゲーミングセッション等、ナラティブの聴き方や語り方に関する協働の学びを実践した。

3. 現在までの達成度

<区分>①当初の計画以上に進展している。

当初予定していた国際プロジェクトは、当初の予定以上に海外研究者との国際コラボレーションがすすみ、各地で大規模なシンポジウムを開催することができた。学際コラボレーション・プロジェクトも発展的に進んでおり、多くの成果を得ている。

4. 今後の研究の推進方策

(1) 23年度は、7月にノースウエスタン大学とノースイースタン・イリノイ大学において、シカゴ・プロジェクトを実施する予定である。当初はサンフランシスコの予定であったが、ライフストーリー研究の第一人者である、マクアダムス教授の全面的協力が得られたので、開催地を変更した。シカゴは質的研究者が集約しているフィールドとして世界的に影響力が大きい場所である。ナラティブ研究の第一人者たちとの多声対話実践によって、大きな成果が期待できる。

(2) 24年度は、これまでの国際・学際プロジェクトの成果を統合して、心理学(生涯発達心理学、社会心理学、臨床心理学)、医学、看護学を学横断し、多文化ナラティブの理論と方法をまとめた報告書『多文化ナラティブの対話教育と臨床支援』を刊行する。また、国際シンポジウムを開催し、国際学会発表やオンラインHPによって、多方面に情報を公開する。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 137 件)

- ① やまだようこ: “時間の流れは不可逆的か?—ビジュアル・ナラティブ「人生のイメージ地図」にみる, 前進する, 循環する, 居るイメージ” 質的心理学研究 9. 43-65 (2010) (査読有)
- ② やまだようこ, 山田千積: “対話的場所(トポス)モデル—多様な場所と時間をむすぶクロノ・トポスモデル” 質的心理学研究 8. 25-42 (2009) (査読有)
- ③ 菅原幸恵, 北上田源, 実川悠太, 伊藤哲司, やまだようこ: “過去の出来事を”語り継ぐ”ということ” 質的心理学研究 8. 6-24 (2009) (査読有)
- ④ 伊藤哲司, 矢守克也: “インターローカリティをめぐる往復書簡” 質的心理学研

究 8. 43-63 (2009)

- ⑤ やまだようこ: “多声テキスト間の生成的対話とネットワークモデル—「対話的モデル生成法」の理論的基礎” 質的心理学研究 7. 21-42 (2008) (査読有)

[学会発表] (計 172 件)

- ① 伊藤哲司: “ハノイの路地のエスのグラフィ—” 国際シンポジウム—心理学, ケア, 分科: 日本とベトナム. (20101227). ベトナム社会科学院 (ハノイ, ベトナム)
- ② やまだようこ: “Models of life-span developmental psychology” 国際シンポジウム—心理学, ケア, 分科: 日本とベトナム. (20101227). ベトナム社会科学院 (ハノイ, ベトナム)
- ③ 杉浦淳吉, 安田裕子, やまだようこ, 吉永崇史, 松嶋秀明: “生き生きとした多声ナラティブを生み出す多重の場所” 日本質的心理学学会第 7 回大会. (20101128). 茨城大学
- ④ やまだようこ, 齊藤こずゑ, 西山直子, 戸田有一, 家島明彦: “ヴィジュアル・ナラティブ研究の方法論—イメージ画をもとに” 日本心理学会第 74 回大会. (20100920). 大阪大学
- ⑤ Yamada, Y., Grabner, A., Strohmeier, D.: “Images of turning points : Cultural-historical representations in the contemporary drawings termed “image map of my life” and traditional folk pictures.” The 29th International Congress of Psychology. (20080724). Berlin, Germany

[図書] (計 72 件)

- ① やまだようこ: “ことばの前のことば—うたうコミュニケーション (やまだようこ著作集 1)” 新曜社. 486 (2010)
- ② やまだようこ, 戸田有一, 伊藤哲司, 加藤義信: “この世とあの世のイメージ—描画のフォーク心理学” 新曜社. 352 (2010)
- ③ 斎藤清二, 西村優紀美, 吉永崇史: “発達障害大学生支援への挑戦—ナラティブ・アプローチとナレッジ・マネジメント” 金剛出版. 274 (2010)
- ④ 伊藤哲司: “みる きく しらべる か く かんがえる—対話としての質的研究” 北樹出版. 157 (2009)
- ⑤ やまだようこ: “質的心理学講座第 2 巻 人生と病いの語り” 東京大学出版会. 280 (2008)

[その他] 科研 HP :

<http://www.educ.kyoto-u.ac.jp/develop/kaiken/index.html>